松本四郎著

日本近世都市論

東京大学出版会

著者略歴
1932年　横浜に生れる.
1956年　横浜市立大学文理学部卒業.
1958年　東京都立大学大学院修士課程修了.
現　在　都留文科大学教授.

主要著書
『江戸商業と伊勢店』(共著)(1962年，吉川弘文館)
『三井事業史』第1巻（共著)(1980年，三井文庫)

現住所
東京都武蔵野市中町 3-16-13-301

日本近世都市論

1983年5月20日　初　版

[検印廃止]

著　者　松本四郎©

発行所　財団法人　東京大学出版会
代表者　江村　稔
113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内
電話（811）8814・振替東京 6-59964

印刷所　株式会社三陽社
製本所　牧製本印刷株式会社

3021-20672-5149

古島敏雄著作集　全十巻

第一期

第一巻　徭役労働制の崩壊過程　A5　定価三〇〇〇円　三一〇頁

第二巻　日本封建農業史　家族形態と農業の発達　A5　定価三八〇〇円　三八〇頁

第三巻　近世日本農業の構造　A5　定価三五〇〇円　六〇〇頁

第四巻　信州中馬の研究　A5　定価三〇〇〇円　四二〇頁

第五巻　日本農学史第一巻　A5　定価三五〇〇円　五二〇頁

第六巻　日本農業技術史　A5　定価四八〇〇円　七〇〇頁

第二期

第七巻　共同体の研究　A5　定価四五〇〇円　三八〇頁

第八巻　地主制史研究　A5　定価四五〇〇円　三九〇頁

第九巻　近代農学史研究　A5　定価四五〇〇円　三八〇頁

第十巻　地方史研究法　A5　定価四五〇〇円　三五〇頁

ここに表示された定価は，物価の変動などにより
変更されることがありますので御諒承ください。

目次

序章　近世都市研究の課題……一
一　都市問題と日本近世史研究……一
二　日本近世都市研究と課題……五
第一章　都市と国家支配……一九
一　貿易都市の支配者と住民……一九
二　城下町と住民諸階層……二八
1　城下町の基本的性格……二八
2　家持町人層の特徴……三〇
3　借屋人層の特徴……三五
三　都市の食糧確保をめぐる領主と住民……三九
1　城下町において……三九
2　畿内の諸都市において……四三
四　畿内における幕府の都市政策……四六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五　都市域の拡大と住民……五一
第二章　都市と農村 (1)——長州藩領内を事例に——……六一
一　在町研究の現状と課題……六一
二　長州藩領内の都市と農村……六九
1　日本海沿岸地域……七一
2　中部山間地域……七九
3　瀬戸内隣接地域……八二
4　瀬戸内地域……八八
5　天保期の都市をめぐる変動……九六
第三章　都市と農村 (2)——越中砺波郡井波町を事例に——……一〇五
一　在町の住民構成と経済的基盤……一〇五
二　在町と城下町……一二三
三　天保期における在町の構造変化……一二八
四　領国支配の政策と都市……一四一
五　都市と農村について……一五二
第四章　都市の民衆 (1)——大坂三郷を事例に——……一六三

一　大坂三郷の住民構成……一六四
二　都市構造の諸問題……一七八
1　「町続在領」の成立……一七八
2　都市住民の創出過程……一八一
3　家請人仲間制度について……一八八
4　住民の生活基盤について……一九一
5　住民の生活困窮と施行……一九四
6　都市構造の特徴……一九六
三　近世後期の経済変動と大坂三郷の住民……一九八

第五章　都市の民衆(2)——江戸を事例に——……二一三
はじめに……二一三
一　都市域の拡大と住民……二一五
二　住民諸階層の存在形態……二三四
三　周辺地域の住民と農村……二五一
四　拝領町屋敷の形成と住民……二六五
五　町規制と住民……二七五
六　住民生活の維持と町会所救済……二八五
七　幕末維新期の都市住民再編成の過程……二九七

八　都市と民衆について……三二
あとがき
図表一覧
索　引（事項・地名）

序章　近世都市研究の課題

一　都市問題と日本近世史研究

ここ数年来、ヨーロッパの中世都市研究の動向が日本に紹介され、学界の注目をあびている。たとえば服部良久「ドイツ中世都市研究の現状と課題」（『歴史評論』三二六号、一九七七年）、森田安一「ヨーロッパ中世都市史研究から」（『地方史研究』一五四号、一九七八年）、魚住昌志・水野絅子・鵜川馨「ヨーロッパ中世都市研究の動向」（『日本史研究』二〇〇号、一九七九年）、魚住昌志「ヨーロッパ中世都市史の研究状況」（『史潮』新六号、一九七九年）などによって、われわれはヨーロッパ中世都市の新しい研究動向を知ることができる。

これまでのヨーロッパの中世都市研究は、ピレンヌやプラーニッツに代表されるところの見解、すなわちヨーロッパ中世都市の成立、展開の担い手は遠隔地商人層であるとし、その遠隔地商人たちの自治と自由を根幹とする中世都市が、封建社会のなかでのアウトサイダーであり、近代社会の萌芽である、というシェーマで一般に理解されることが多かったといえよう。こうしたヨーロッパ中世都市観は、これまで日本史の研究者に大きな影響を与えてきたことは周知の事実である。それは、日本中世で自由都市とみなされた堺の研究といった都市史の分野にとどまらないで、その堺を抑圧したところの領主権力の性格にまで及ぶ封建制論にもかかわって論じられてきていたのである。

ところで、ピレンヌなどによる中世都市論への批判がヨーロッパだけでなく、日本においても強まっていることは、

前に記した服部氏などによる研究動向にもうかがうことができる。そこにうかがわれる研究視角は、中世都市を中世「封建社会」の本質的な構成要素とするという点でほぼ一致していよう。具体的には、農業社会および領主権力とのかかわりで都市の成立を論じ、都市を農村との親近性と結合の側面から重視する研究とか、社会的分業を中心にした都市と封建社会の一体的把握をめざす研究が出はじめているのである。

問題は、こうしたヨーロッパ中世都市研究の新展開に対し、日本史研究者の側の対応である。たとえば日本近世史研究者の一人、今田洋三氏は、「最近のヨーロッパにおける中世都市研究では、自由と自治の共同体概念が崩壊しつつあるというのである。これはショックであった」と率直に述べている。(1)「自由、自治の市民共同体というヨーロッパ中世都市観」とか、「封建的支配体制に対する反体制的」存在である都市というテーゼがこれまで強く日本史研究者をとらえていたのだからこそ、今田氏にとってきわめて「衝撃的」なものとなったのも当然であろう。

こうしたヨーロッパ中世都市に関する新しい研究動向は、今田氏も指摘されているように、歴史教育の現場にたずさわっている教師として、これから堺などの自由都市をどう教えていったらよいかというとまどいとともに、自己の歴史研究のなかに、これまでのヨーロッパ中世都市観が無意識のうちに影響していたのではないかとあらためて点検する必要を生じさせているといってよいだろう。それほど重要な問題であるということを今田氏の感想のなかからひき出してくることができるのではなかろうか。

しかし、日本史研究者にとって、こうしたヨーロッパでの新しい研究動向をうけて「ショック」だといってすまされない問題があるようにも思う。それはわれわれのヨーロッパ史研究の受けとめ方、かかわり方の問題だと思う。ヨーロッパ史研究の成果をわれわれが受けとめ、日本史研究の武器としてきたことはたしかにあったし、またその有効性も認めてきた。しかしいまヨーロッパ中世都市の新しい研究動向が出てきたところで、その結論的部分をそのままふたたび受け入れてあらためてわれわれの研究視角とし、課題設定をするということにはいささか抵抗がある。(2)

ヨーロッパ中世都市の新しい研究動向に基本的に賛意を示しつつも、日本史研究者としての都市研究の取組み方について、独自の検討が必要なことはいうまでもない。たとえばこれまでの日本近世史の分野での都市研究は、日本における自治と自由の都市の代表としての堺が、領主権力によって抑圧されたあと、細々と生きながらえた自治と自由の証明を抽出することに関心を集中し、近代社会へ接続させるといった視角で行われてきたといえないだろうか。

しかし、自治と自由という概念のヨーロッパ的基準より、日本における歴史具体的な内実が問題なことはいうまでもない。近世都市の歴史のなかで、自治と自由のあかしがあったか、なかったかと探すことが大事なのでなく、近世都市の民衆が国家的、社会的規制の場のなかで、どのような連帯をつくり出すことができ、どういった現状打破のための多様な途を見出しているのか、といったことを検証していくことが必要なことはいうまでもない。こうした研究方法をとることによってはじめて、日本近代を直接つくり出したところの歴史的前提を具体的に明らかにすることができると思うからである。

たとえば、歴史学研究会の近世史部会が、維新変革期を世直し状況と主張したとき、[3] そこで都市と民衆の役割が論じられたが、これまで孤立分散的な性格をもっていた百姓一揆とちがって、維新変革期の世直し一揆は、農村部に滞留する半プロ化しつつある農民層を主体としておきたのである、ただそれら世直し一揆が結びついて、全国的規模での農民反乱になりえなかったのは、都市の前期プロなどによる打ちこわし勢力との同盟ができなかったからだという。とすると、なぜ日本近世の都市は農村との結びつきがむずかしい状態でできているのだろうか、ということが近世史研究の課題として提起されてくるのである。世直し状況について研究が進められていくなかで、都市については、住民相互の連帯のあり方とそれを阻止している状況についての研究が深められていき、それは同時に、日本近代の市民の運動の特質を理解するための、歴史的前提を明らかにするという問題意識がはっきりとしてきたのである。

近代に目を据えての日本近世の都市研究は、当然のことながら、近代の都市問題の状況と深くかかわるといってよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い。都市問題の状況は近世都市の研究課題の設定に大きな影響を与えるのである。そこから学ぶことの一、二を記すとつぎのとおりである。今日の都市での生活のしにくさ、不満のうっ積は、基本的には都市で生活をしていくうえでどうしても必要な共同消費的施設（上・下水道、ゴミ処理、保育園等）の不十分さにあることはほぼ一致しているといってよいだろう。[4] 農村のように、生活していく上での必要なものが一経営の内部においてそろっているのとちがい、都市での生活はどうしても共同消費的施設が必要である。にもかかわらずそうした施設が不十分なのはどうしてなのか、またそれを改善していくための住民の運動はなぜ強力なものにならなかったのか、といったことが問題なのである。

こうした日本の都市の特徴は、宮本憲一氏によると、都市が農村に依存するところが大きいことに原因があるという。都市の労働者は失業したり、結核のような長期療養の必要な疾病にかかると農村の本家にかえるのが一般で、これによって社会福祉施設は節約され、失業者のたまり場としてのスラム問題は欧米ほど深刻なものにならなかったのであり、労働者の一部は農村から通勤したので住宅難の歯どめがされていたし、また都市の屎尿の大部分は農村の肥料として処理されたので、下水道の節約となっていったのであるという。こうして日本の都市問題は農村に還元して潜在し、農村という共同体と家族制度というふたによってとじこめられ爆発しなかった、と宮本憲一氏は指摘している。

今日の都市問題の深刻さは、こうした農村依存の仕組みが崩れたことによって発現したものであるとする。とするならば、そのうえに立って、あらためて日本の都市の歴史的特徴について考察を深めていくことが大事なことであろう。そこでは当然に、こうした特徴をもった都市での生活をよくしていこうとする住民たちの連帯や闘いが容易なものでなかったのではないかという問題ともかかわってこよう。

日本における都市の特質を、こうした農村との結びつきのなかでみていこうとする視角は、単に現代の都市を問題にする場合だけでなく、その歴史的前提を明らかにする上で、大事な課題の一つである。はじめにみてきたような、

ヨーロッパの歴史のなかで形成された都市の自治と自由という概念を、そのまま日本で求め続けるより、日本の歴史具体的な状況のなかで、都市の住民たちがつくっていったところの独自の前進の仕方を、都市の構造的な特徴と結びつけて明らかにしていくことがいま求められているといってよいだろう。

二　日本近世都市研究と課題

近世都市の研究をこれから進める場合、これまでの研究史から何をうけつぎ、どう発展させていくべきか、といった整理が必要だと思う。ここ数年来、近世都市の研究はしだいに増えてきたが、この状況はつぎのような研究史を経てきているといえよう。

(1)、戦前から蓄積されてきた個別都市の研究をのぞくと、戦後の社会経済史研究のなかで、都市研究は不振をきわめていた。

(2)、最近は幕藩制国家論の展開にともない、都市の位置づけについての提言などが出てき、また現実の都市問題への関心が、近世都市研究を深めていった。

(3)、注目すべきはここ数年に主として(2)からの刺激をうけて、個別の都市研究の積重ねが多角的な視点——都市行政、生活史全般にわたって行われていること。

こうした研究段階を念頭において、ここで都市についての研究史の整理をはじめようとする意味は、(3)に指摘した多様な研究テーマの追究と個別性の重視といった研究の現状への危惧の念とかかわっている。もちろん都市行政、生活史全般にわたる多彩なテーマの研究が間違っているとか、不必要なことだなどといっているわけではない。むしろ近世都市の研究を進めていくうえで欠かすことのできない過程だとさえ思っている。しかし、この(3)の研究段階が(2)

の問題提起とどうかかわるのかということについてははっきりしないことが多い。つまり多様な研究テーマはそれ自体が自己目的化しているのではないかとの危惧である。もちろん、性急に一つ一つの個別的な事柄の歴史的意義を論じなければならないなどというつもりはないが、あまりにその興味や関心が分散化してしまうことの方が問題ではないかと思う。

現在の近世都市研究の課題を考えるためにも、これまでの研究状況を改めて検討しておく必要がある。以下近世都市に関する研究史をまず小野均、豊田武、原田伴彦氏らの仕事をとおして検討していこう。小野均氏の近世都市に関する仕事は、『近世城下町の研究』（至文堂、一九二八年）と「近世都市の発達」（岩波講座『日本歴史』18、一九三四年）の両著に代表されるだろう。この小野氏の仕事でもっとも注目すべき点は、近世における都市の急激な発展の特徴をつぎのように指摘していることであろう。

徐々に小聚落より成長発展し来りしよりは、寧ろ人為的に既に準備せられたる諸要素を一挙にして集中綜合し新町を構成せんとするによる。

近世都市の成立をこうした新町設立という点に見出している点は、小野氏が近世都市は「専制的権力の発動による殖民計画」によって成立したという別のところでの指摘とともに、研究の基本的視点を明確に示しているといってよい。

小野氏の仕事の優れた特徴は、この近世都市成立の基本的な視点と深くかかわって、都市計画、都市法制、人口集中、都市の商工業の諸問題が具体的に検討されていることだろう。小野氏の著書には都市のさまざまな問題が検討されてはいるが、それはすべて近世都市の特質理解のために位置づけられているといってよいことである。したがって城下町など近世都市の没落もまた、これまで政治的に分離させられていた農村において都市化が進展したことに基本的な原因をみているのである。

このように小野氏の近世都市研究は、成立から没落の過程を、近世都市の特質とかかわらせて一貫して論じているところがもっとも優れている点であるといってよいだろう。さらに小野氏の近世都市の研究は、都市における社会問題とか、都市と農村の関係という、今日の都市研究の課題がすでに重視されていることも興味深い。すなわち都市は農村の商業を強く規制する一方で、奉公人の供給をうけるという関係があるとか、奉公人の転化した借屋数の増加は、都市内部の貧富の矛盾の発生という社会問題をひきおこした、といった点を小野氏は指摘しているのである。

小野均氏の近世都市に関する研究はきわめて明快な論理で構成されているだけでなく、豊富な史料に裏付けられた実証性をもともなっていることはいうまでもない。小野氏は当時すでに刊行されていた地方史誌類を多く使っているが、主として東大史料編纂所に所蔵されている根本史料を駆使していることに優れた特徴があるといえよう。

小野氏の『近世城下町の研究』が刊行されてからほぼ三〇年たって豊田武氏の『日本の封建都市』（岩波全書、一九五二年）が出て、近世都市研究の水準をさらに引上げることになった。小野氏と比較して豊田氏の仕事はつぎの点に特徴がある。第一に近世都市を中世社会の一定の展開、つまり中世から近世への連続のなかで位置づけようとしていることである。具体的には近世都市の成立の前提として中世末期における自由都市の存在を重視しているのである。つまり堺などでの自治の展開とそれへの弾圧のうえに近世都市をみている。このことは日本における自由都市の存在の強調によってヨーロッパと並ぶ自治の伝統を見出そうとしているといえよう。第二に、こうした中世と近世都市を「自由都市」を媒介することによって、ヨーロッパとの対比が検討の中心となり、近世都市の特質を究明するという関心が必ずしも強くなくなったことである。もちろん豊田氏も近世都市の都市計画、人口構成、行政機構、商工業の諸問題をもとにみているが、その位置づけは小野氏とくらべると事例の追加といった場合が多い。たとえば、農村の取扱い方でも、豊田氏は人口構成の変化、独占的商工業機構の崩壊のなかで個々になされているだけで、都市と農村の関係全体をみるという関心は強くないといってよい。また、近世都市の社会問題も近世都市の特質と深くかかわっ

て重視されているというより、解体期の変化という一般的な状況のなかで位置づけられているといえよう。第三に、豊田氏の場合、自由都市の重視とかかわって、近世都市内部での自治的要素の存在に着目し、港町などの町内部での住民自治の仕組みや自治の要求の動きを近代都市に直接結びつく前提として重視している。近世都市の研究視角という点では小野均氏と豊田武氏ではかなりのちがいがあることを確認しておく必要があるのではないかと思う。

戦前から中世都市の研究に従事していた原田伴彦氏は、戦後も個別研究を積み重ね、それを『日本封建都市研究』(東京大学出版会、一九五七年)、『日本封建制下の都市と社会』(三一書房、一九六〇年)という著作にまとめている。この著書は豊田氏のとちがって通史としての型をとらずに自治組織、身分制度、下層民、打ちこわし、在郷町といったテーマごとの研究論文がそのまま収録されている。原田氏の研究視角も自由都市を評価し、近世都市成立期における町人層の前代からの系譜的な関連をみて、門閥的町人層の存在を指摘し、その連続性を重視しているところは同じで、港町などにみられた「自治」的性格の強調も豊田氏と共通している。

この著書の自治組織などの個別テーマの論文はそれぞれ高く評価されるべき仕事だといえる。ただ問題なのは、身分制度の論文などを除くとそれぞれが近世都市固有の特質を追究しているとはいえないのではないかという点である。それはとくに都市騒擾の研究などにうかがうことができる。すなわち、惣町一揆から世直し一揆へと展開をみた都市騒擾は、農民闘争の場合に現われる惣百姓一揆の段階から世直し一揆の展開と同じ論理で考えられている。また、都市下層民の研究にしてもその中・後期における農民層分解の段階と照応して借屋層の増加をみているところに特色がある。つまり農村構造の変化、商品生産の発展にと結びつく都市の諸変化をみているのであって、農村とは異なる都市固有の特質をみていくという観点はあまり強くない。

これに対し身分制度についての研究は、被差別部落が都市の周辺部に設けられ、都市内部の警備、刑吏部門を受けもつ役割を与えられているところに注目しているところなどは、幕藩国家のなかでの都市の位置づけを考えていくう

えできわめて重要な点を指摘していると思う。

これら豊田、原田両氏の近世都市についての研究の特徴は、小野氏の戦前での仕事とちがって、自由都市の重視、あるいは農村構造の変化と対応する都市内部の諸変化をみるようになったという点を指摘できる。ところでこの豊田、原田両氏の仕事をみて気付くことは、都市計画とか自治制度といったテーマごとに数多くの豊富な事実が提示されていることである。

そこで豊田氏の著書から「都市の行政機構」、原田氏の著書から「封建都市の自治組織」の、テーマの論理構成と資料のかかわりを具体的にみていくとつぎのようになる。

豊田氏の場合は、(1)町奉行とその役所の制度を江戸、大坂を中心に述べ、ついで、(2)町人側の組織として、(イ)城下町の町年寄、名主たちの権限や世襲制といった制度面を、江戸をはじめとする全国の城下町から事例を集めている。そして、(ロ)商業都市——とくに港町を中心に、町人の民事上、行政上についての自治的性格の強いことを合議制、会所の存在、役員の選挙、財政などについて大坂、長崎、兵庫、博多の事例を中心に述べている。

これに対し原田伴彦氏の場合は、都市の自治共同組織を封建都市の発生、展開、解体の過程とのかかわりでみている。(1)室町、戦国期の都市の自治的結集が進行していったことを前提に、(2)江戸期の都市の共同体的自治機構（町、五人組）が、命令の伝達、治安の維持といった都市行政機構の末端としての性格を強くもっていることを、江戸、京都をはじめとする全国の都市の状況で紹介され、ついで、(3)江戸中・後期になると御用的自治機構の中で、(イ)一部に領主と町役人の間の対立、(ロ)港町などの自治的性格の出現、(ハ)御用的な自治機構の有名無実化といった動きが出てくることを全国各地の事例から紹介する。(イ)については高田、豊後府内、松山、江戸、広島、鳥取、津、綾部といった城下町が中心で、(ロ)は兵庫、近江八幡、越前三国、西宮、青森、大津、新潟、長崎、桐生といった港町や在郷町、(ハ)は京都、大坂、江戸、堺、鳥取といった三都を中心にみている。最後に(4)幕末期には都市自治機構の形骸化がいっそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com